

# 運動部活動が高校生のアイデンティティに与える影響

大隈 節子\*・清水 一巳\*\*

**A study on influence that belonged to the sports club  
in a school gives to identity of high school students**

**Setsuko OKUMA, Kazumi SHIMIZU**

## 要 旨

本研究は運動部活動と高校生のアイデンティティとの関連性について検討するために、エリクソンによって定式化された自我の発達段階図式に則り、心理社会的発達課題の達成状況を測定評価するために開発された質問用紙 EPSI (全8段階 56項目) の中から選択した8項目について男女別に運動部所属者、文化部所属者、無所属者で比較検討を行った。男子においては8段階中の6段階について、女子においては7段階の発達課題において運動部所属者の方が有意に達成傾向にある者の割合が多いという結果であった。

## 1. はじめに

全国高等学校体育連盟の調査結果<sup>1)</sup>によれば、H23年度の全国高等学校運動部活動の加入率は男子が45.0%と前年度の45.2%からほぼ横倍の状況にあり、女子においては前年度より0.4%減少の26.1%という結果であった。三重県の高校運動部加入率の現状<sup>2)</sup>においても平成15年度から男女ともに微増してはいるものの、男子が41.4%と全国と比べて3.6%低く、女子においても23.6%と全国平均と比べて2.5%低いという結果に留まっている。さらに、中学校においては全国平均に比べ全国平均を上回っている加入率が、高校では男女ともに全国平均を下回っていることから、中学校から高校に向けた運動部活動継続率は他県に比べて低い位置にあることが予想される。

本県の現状に限らず、近年の青少年を取り巻く環境は大きく変化し、さらに昨今の行き過ぎた勝利至上主義や体罰等、スポーツ界が抱えているさまざまな問題と相俟って、まさしく学校運動部は改革の過渡期にあると言ってよいだろう。過去を振り返れば、これまでわが国の青少年の競技スポーツ活動は学校運動部が教育的活動の一環としてその機能を果たしてきたのであり、試合での勝利や敗北、緊張や興奮、また自己の限界を知る経験や仲間との連帯など、独自のさまざまな経験を提供することで教育的側面への影響を及ぼしてきたと言ってよい。しかしこのような問題現状を踏まえ、今後運動部活動がどう変わっていくべきかについては、多様な側面からその方向性について検討していくことが急務である。また、これまで本研究により大学運動部活動によるアイデンティティへの影響<sup>3)</sup>については検討しているが、高校生への影響については検討していないことから、本研究では高校生への運動部活動の影響を運動部所属者、文化部所属者、無所属者別に比較検討することを目的とした。

\* 三重大学

\*\* 千葉敬愛短期大学

## 2. 研究の視点～エリクソンのアイデンティティ論に依拠して～

アイデンティティは、「私とはいったい何者か」という問いに対し、各人の自分らしさや自己の存在証明を表現するための言葉である。もともと、精神分析医である E・H エリクソンによって概念化された学術的な専門用語であり、わが国においては 1970 年代に入ってから注目された比較的新しい概念である。この概念が着目された背景には、自分らしさへの問いであるところのアイデンティティが心理的なものと社会的なものとの相互の兼ね合いの中で成り立つ意識であり、「変わっていく」ことが前提になっているということがあげられよう。つまりそれまで、人間にはそれぞれに備わっている自分らしさの中核があり、そのはたらきに従って個性は発揮されるという西洋の個人主義的捉え方を基盤に「変わらない」ことが前提とされていた。それに対しエリクソンの掲げたアイデンティティ概念はそれを関係性の発達と共に常に変化するものとして人間の存在の捉えなおしを試みたのである。その根底にはエリクソンが描く「相互関係的な存在」という人間像の一貫した視点が貫かれており、アイデンティティ概念を通して「人はどのようなときに生き生きとしていくか」について明らかにし一定の筋道を与え理論化することが目指されてきたといえる。

そこで、本研究では以上の点に鑑み、エリクソンによって定式化された自我の発達段階図式に則り、心理社会的発達課題の達成状況を測定評価するために開発された質問用紙 EPSI<sup>4)</sup>（全 8 段階 56 項目）うち、各段階で設定された 7 問の中から 1 問ずつを抽出した 8 問について運動部所属者、文化部所属者、無所属者で比較検討をおこなった。本来ならば、全 56 項目で比較検討するところではあるが、今回の調査では対象者への配慮により質問数を削減した上での検討であることを示しておく。

## 3. 調査の概要

### 1) 調査対象

- ①母集団：三重県内県立・私学高等学校 1～3 年生
- ②標本数：8,280 人

### 2) 抽出方法：層化無作為抽出法

県立 (55)						私立 (14)					
1 年		2 年		3 年		1 年		2 年		3 年	
男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20

3) 調査時期：平成 25 年 1 月上旬 ～ 1 月末日

4) 調査方法：質問紙によるアンケート調査

5) 回収結果：6,467 部 (78.1%)

6) 有効回答数：6,234 部 (75.3%)

7) 回答者の属性

#### ①性別

	度数	パーセント
男性	3,207	51.4
女性	3,027	48.6
合計	6,234	100.0

②学年

	度数	パーセント
高校一年	2,479	39.8
高校二年	2,488	39.9
高校三年	1,267	20.3
合計	6,234	100.0

③部活動への関わり

	度数	パーセント
文化部に所属している	837	18.3
運動部に所属している	2,213	48.5
何もしていない	1,513	33.2
合計	4,563	100.0

4. 調査結果

1) 信頼性について

信頼性を測定する項目のうち、「周りの人々は、私のことをよく理解してくれている」に対する回答を比較検討したところ、有意な差が見られた。男子は、「当てはまる」、「やや当てはまる」を併せて、

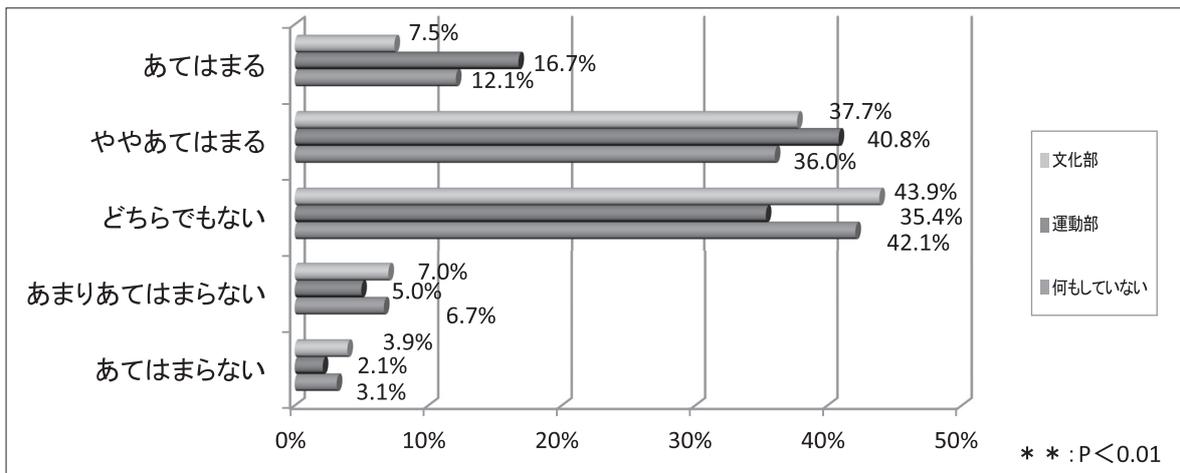


図1 「周りの人々は、私のことをよく理解してくれている」への回答と部活動への関わり (男性)

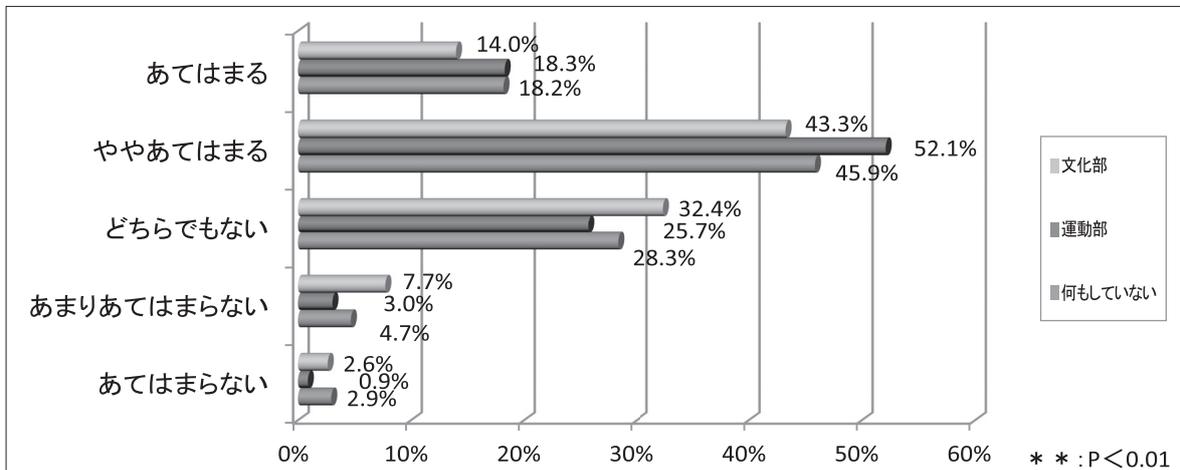


図2 「周りの人々は、私のことをよく理解してくれている」への回答と部活動への関わり (女性)

最も割合が多かったのは運動部所属者 57.5%であり、次に無所属者 48.1%、文化部所属者 45.2%という結果であった。女子で最も割合が多かったのは運動部所属者 70.4%であり、次に無所属者 64.1%、文化部所属者 57.3%という結果であった。

2) 自律性について

自律性を測定する項目のうち、「私は自分の判断に自信がない」に対する回答を比較検討したところ、有意な差が見られた。この質問については EPSI の逆転項目であることから、男子は、「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」を併せて、最も割合が多かったのは運動部所属者 24.9%、次いで文化部所属者 23.2%、無所属者 22.3%という結果であった。女子は、順に運動部所属者 17.9%、次いで無所属者 17.6%、文化部所属者 15.6%という結果であった。

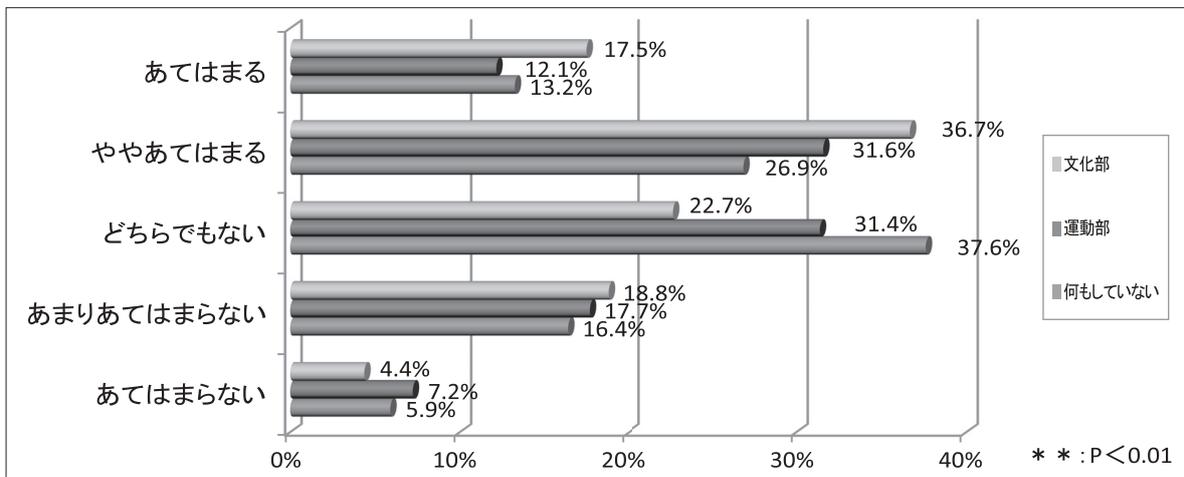


図3 「自分の判断に自信がない」への回答と部活動への関わり (男性)

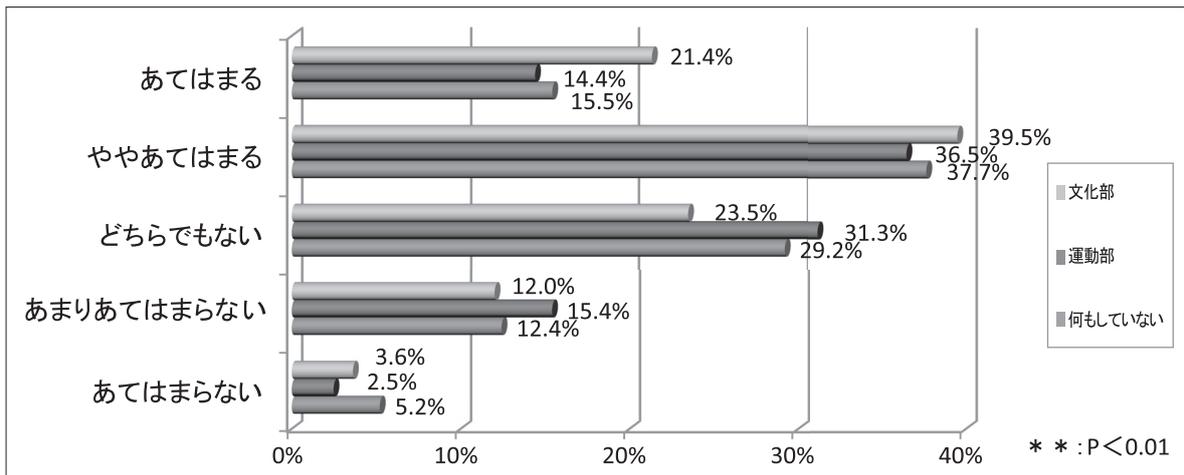


図4 「自分の判断に自信がない」への回答と部活動への関わり (女性)

### 3) 自主性について

自主性を測定する項目として想定した「他者と一緒に何か物事を行う時、私はよく受け身になってしまう」に対する回答を比較検討したところ、有意な差が見られた。この質問についてはEPSIの逆転項目であることから、男子は、「あてはまらない」「あまりあてはまらない」を併せて、最も割合が多かったのは運動部所属者17.6%、次いで無所属者15.4%、文化部所属者10.5%という結果であった。女子もまた順に、運動部所属者16.0%、次いで無所属者15.8%、文化部所属者12.0%という結果であった。

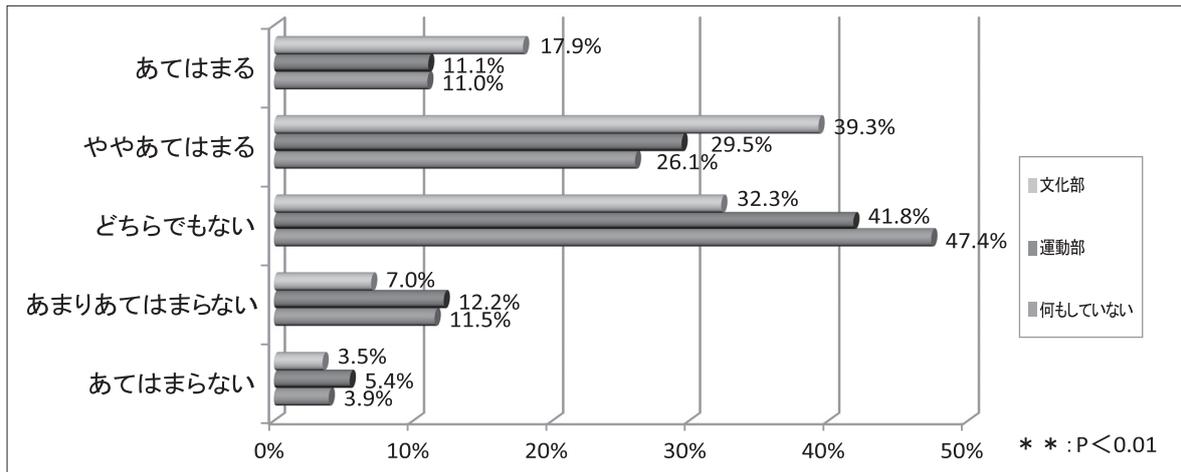


図5 「他者と一緒に何か物事を行うとき、よく受け身になる」への回答と部活動へのかかわり（男性）

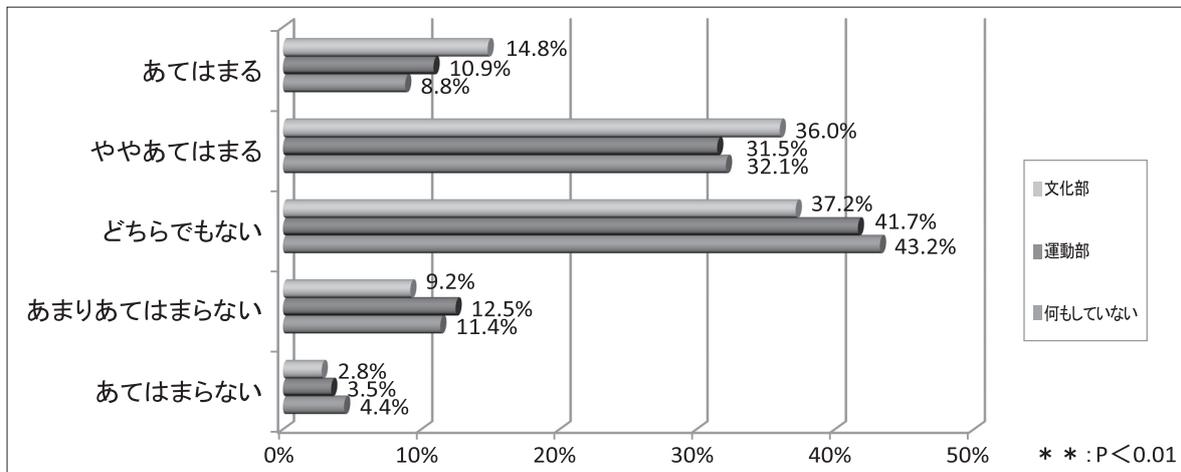


図6 「他者と一緒に何か物事を行うとき、よく受け身になる」への回答と部活動へのかかわり（女性）

### 4) 勤勉性

勤勉性を測定する項目のうち「目的を達成しようがんばっている」に対する回答を比較検討したところ、有意な差が見られた。男子は「当てはまる」「やや当てはまる」を併せて、最も割合が多かったのは運動部活動所属者75.9%であり、次に文化部所属者62.9%、無所属者57.0%という結果であった。女子で最も割合が多かったのは運動部活動所属者73.8%であり、次に文化部所属者62.9%、無所属者53.9%という結果であった。

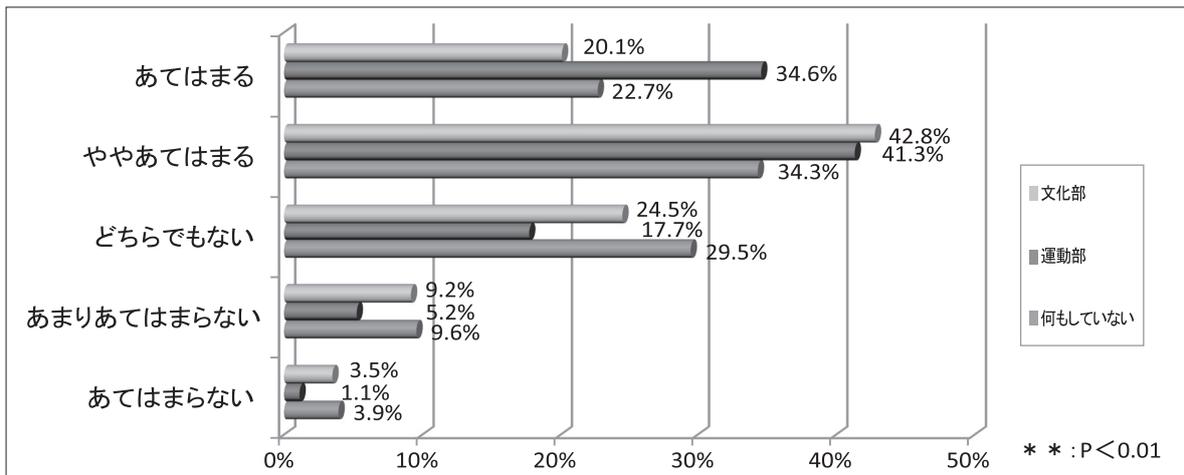


図7 「目的を達成しようとしている」への回答と部活動へのかかわり（男性）

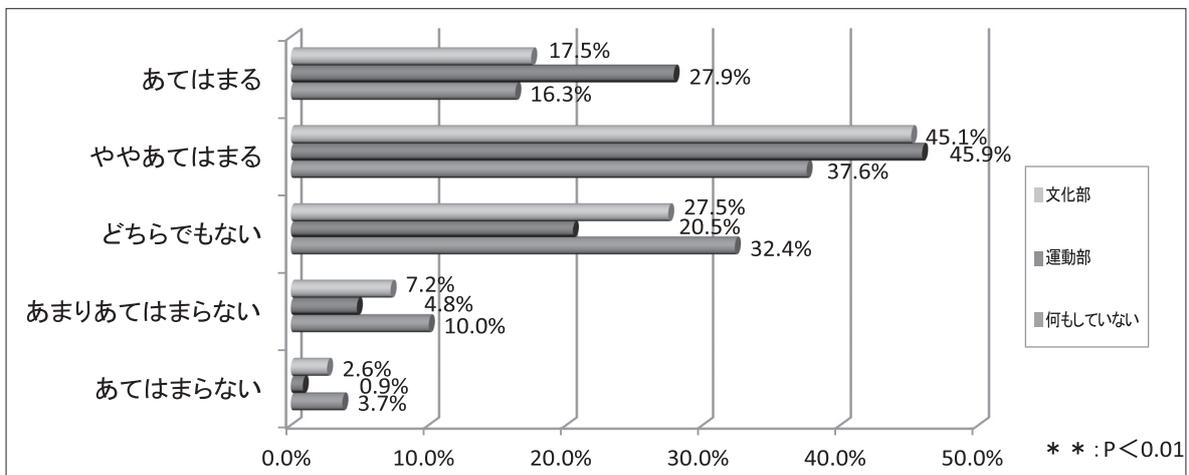


図8 「目的を達成しようとしている」への回答と部活動へのかかわり（女性）

### 5) 同一性

同一性を測定する項目のうち「自分が好きだし、自分に誇りをもっている」に対する回答を比較検討したところ、有意な差がみられた。男子は「当てはまる」「やや当てはまる」を併せて、最も割合が多かったのは運動部活動所属者 30.4%であり、次に無所属者 27.5%、文化部所属者 24.9%という結果で

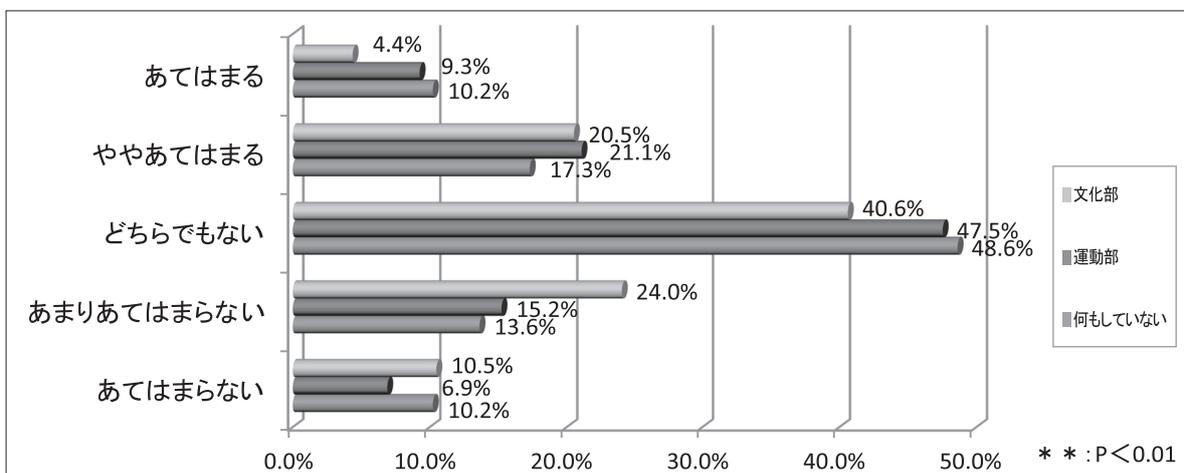


図9 「自分が好きだし、自分に誇りをもっている」への回答と部活動へのかかわり（男性）

運動部活動が高校生のアイデンティティに与える影響

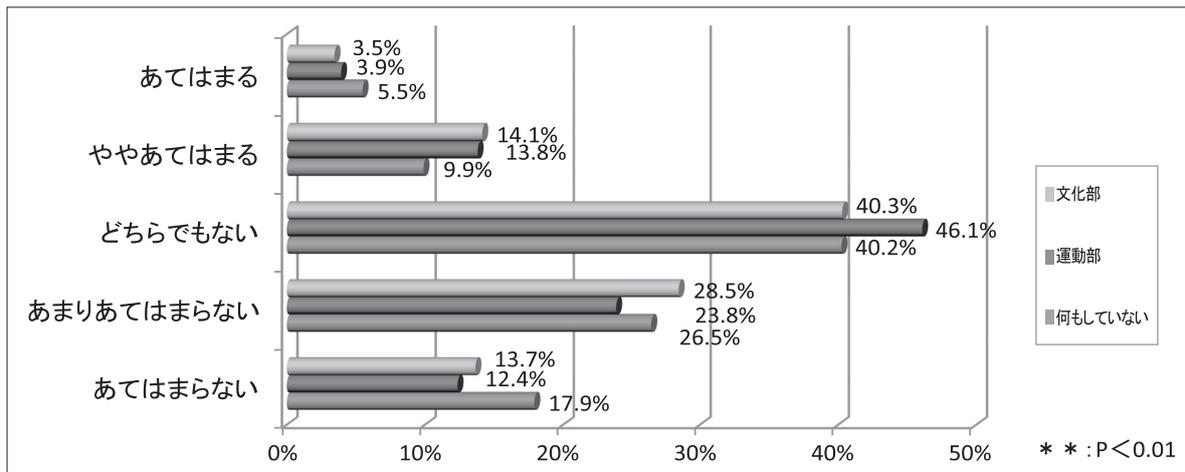


図10 「自分が好きだし、自分に誇りをもっている」への回答と部活動へのかかわり（女性）

あった。女子で最も割合が多かったのは運動部活動所属者 17.7%であり、次に文化部所属者 17.6%、無所属者 15.4%という結果であった。

6) 親密性

親密性を測定する項目のうち、「他の人達と親密な関係を持てている」に対する回答を比較検討したところ、有意な差がみられた。男子は「当てはまる」「やや当てはまる」を併せて、最も割合が多かったのは運動部活動所属者 65.3%であり、次に無所属者 56.2%、文化部所属者 53.3%という結果であった。女子で最も割合が多かったのは運動部活動所属者 66.2%であり、次に文化部所属者 60.0%、無所属者 59.2%という結果であった。

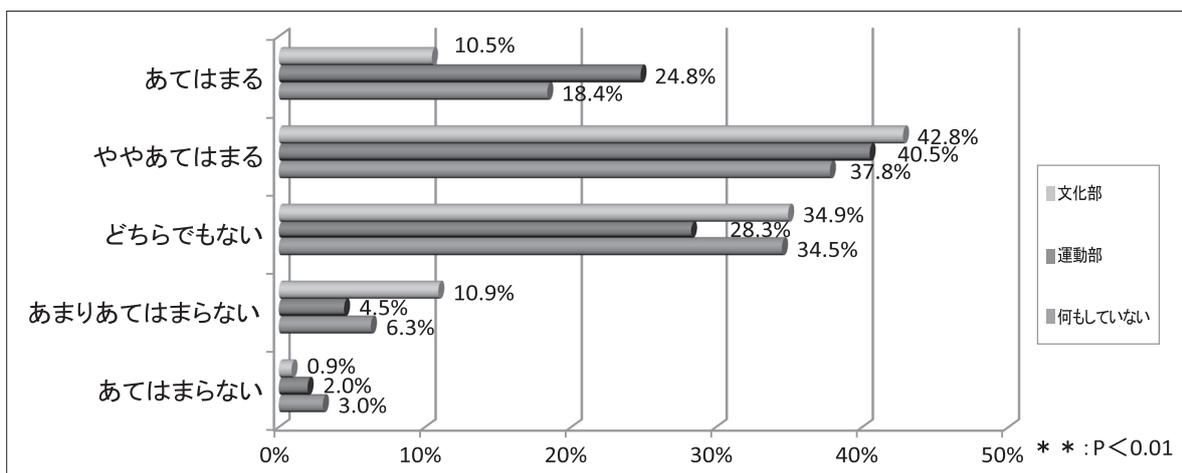


図11 「他の人たちと親密な関係を持てている」への回答と部活動へのかかわり（男性）

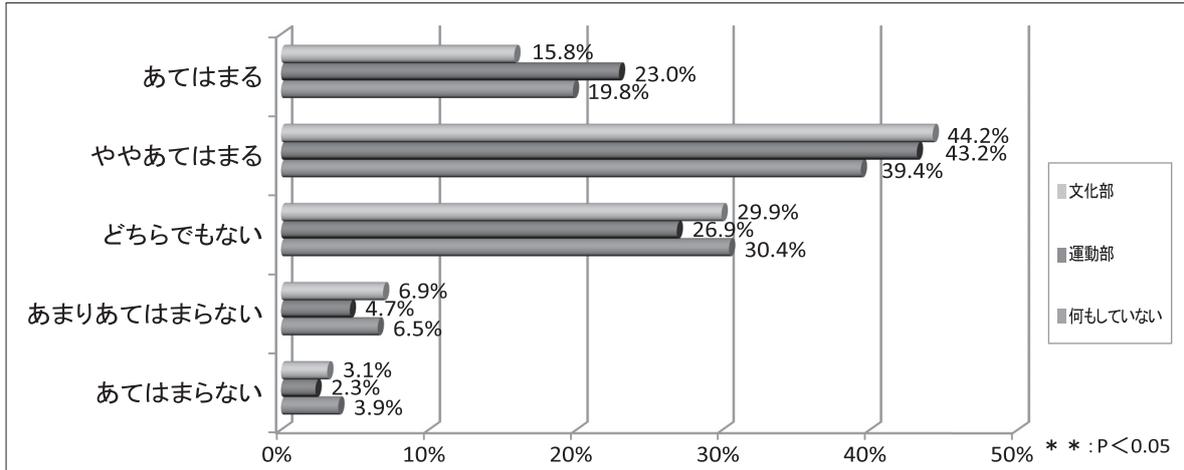


図12 「他の人たちと親密な関係を持っている」への回答と部活動へのかかわり（女性）

7) 生殖性

生殖性を測定する項目のうち、「年下の子や後輩のめんどろをよく見る」に対する回答を比較検討したところ、有意な差が見られた。男子は「当てはまる」「やや当てはまる」を併せて、最も割合が多かったのは運動部活動所属者 48.0%であり、次に無所属者 36.6%、文化部所属者 31.0%という結果であった。

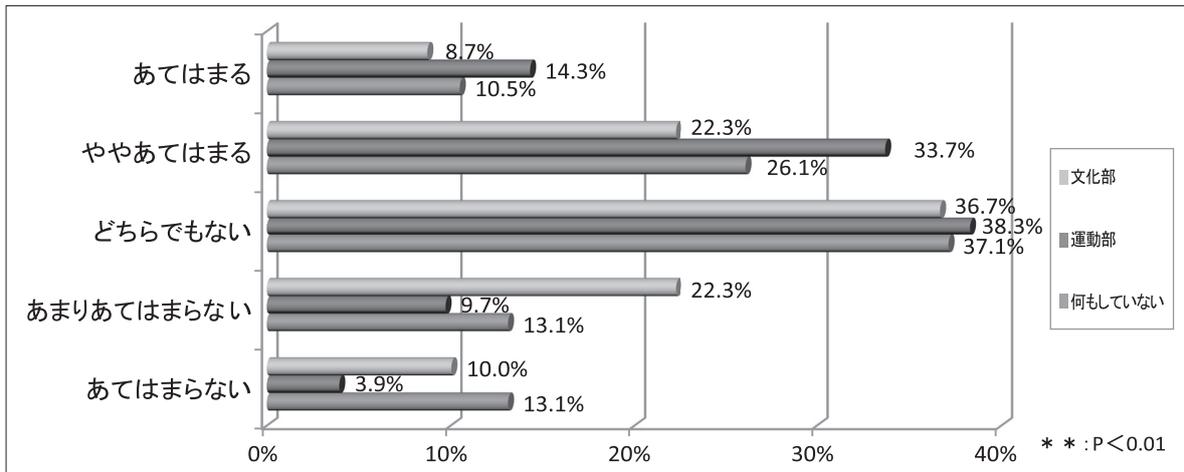


図13 「年下の子や後輩のめんどろをよく見る」への回答と部活動へのかかわり（男性）

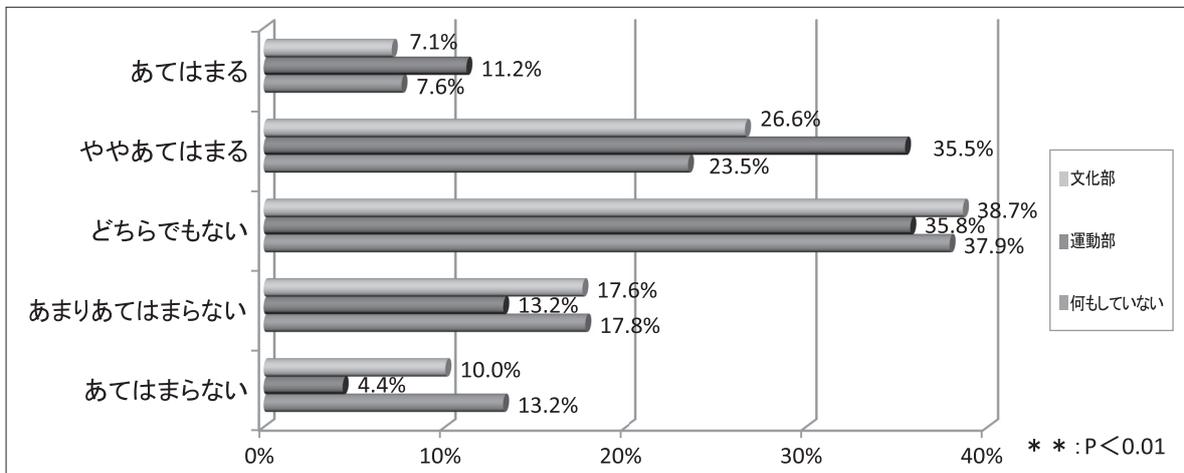


図14 「年下の子や後輩のめんどろをよく見る」への回答と部活動へのかかわり（女性）

た。女子で最も割合が多かったのは運動部活動所属者 46.7%であり、次に文化部所属者 33.7%、無所属者 31.1%という結果であった。

### 8) 統合性

統合性を測定する項目のうち「悔いのない人生を歩んでいる」に対する回答を比較検討したところ、有意な差が見られた。男子は「当てはまる」「やや当てはまる」を併せて、最も割合が多かったのは運動部活動所属者 45.9%であり、次に無所属者 41.8%、文化部所属者 35.8%という結果であった。女子で最も割合が多かったのは運動部活動所属者 38.6%であり、次に無所属者 31.5%、文化部所属者 29.9%という結果であった。

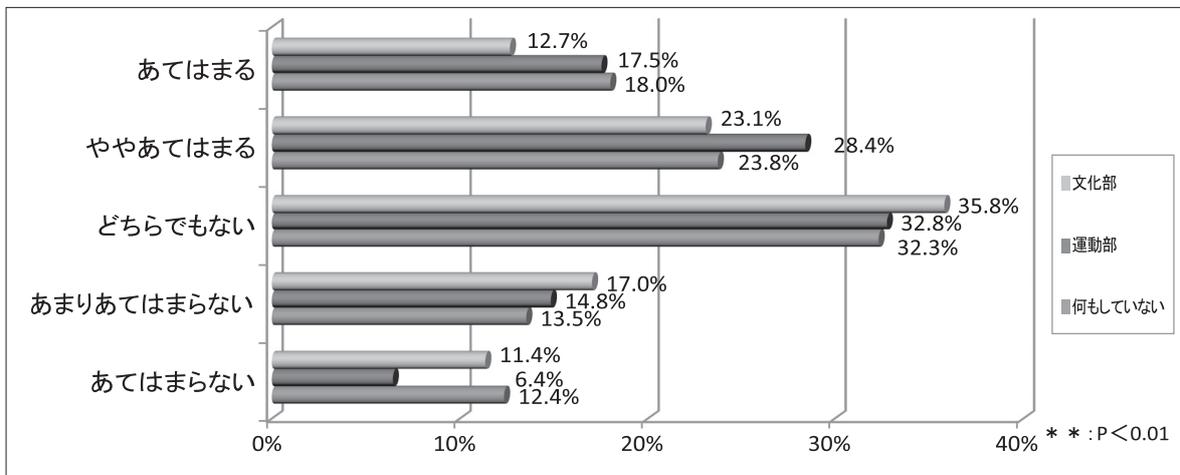


図 15 「悔いのない人生を歩んでいる」への回答と部活動へのかかわり（男性）

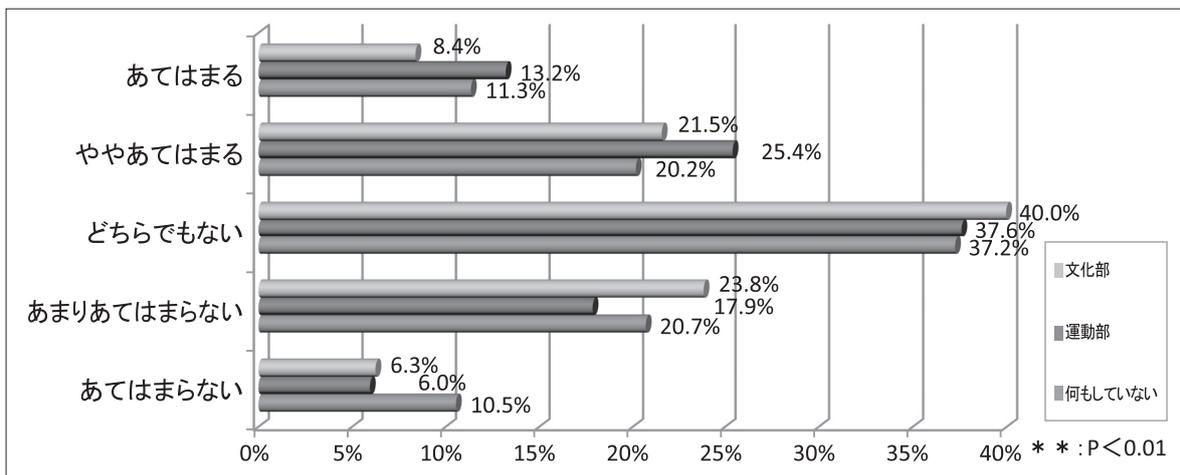


図 16 「悔いのない人生を歩んでいる」への回答と部活動へのかかわり（女性）

## 5. 考 察

今回の調査において、高校生の心理社会的発達課題の達成状況について設定された 8 段階ごとの質問について男女別に運動部所属者、文化部所属者、無所属者で比較検討を行った結果、男女ともにすべての発達課題において、他よりもプラスの回答をしている割合が多いことが分かった。

また、男子の文化部所属者については、自律性、勤勉性が2番目に多く、これらを除く他の6つの発達課題において最もプラスの回答をしている割合が少ないという結果であった。一方、無所属者においては上記で示した文化部所属者と反対に自律性、勤勉性を除く他の6つの発達課題においては運動部所属者について2番目に割合が多いという結果であった。

女子の方は、文化部所属者と無所属者の比較において勤勉性、同一性、親密性、生殖性については文化部所属者の割合が多く、信頼性、自律性、自主性、統合性の4つにおいては無所属者の割合が多いという結果であった。

これらの結果から、高校運動部所属者は男女ともにすべてのアイデンティティ発達課題に対しプラスの影響がみられ、さらに文化部所属者、無所属者の比較においては、性別により達成状況の順位は異なることが分かる。

また、今回の調査対象である高校生は青年期にあたり、この時期には集団や社会への忠誠心という徳を獲得するために順風満帆な経験だけでなく、同一性拡散の危機も経験し、それを乗り越えることにより自分という存在を明確に理解し、人生をどう生きたいかをしっかり掴んでいる感覚を獲得することが目指されるといっている。今回の調査においては運動部所属者だけでなく、文化部所属者、無所属者のすべてにおいて同一性の割合が男女ともやや低い結果であった。さらに、自律性、自主性においても他の課題の達成度に比べその割合が少ないことを含め、これらの傾向が高校生の特徴であるのか、他の時期との比較を含めた検討が必要であろう。

## 6. まとめ

本研究は、運動部活動の意義について検討するために運動部活動と高校生のアイデンティティとの関連性について検討した。今回の調査では、高校生のアイデンティティに及ぼす影響の観点からみれば、男女ともに運動部所属者の方がすべての項目において文化部所属者、無所属者よりも発達課題達成傾向にある割合が多いということであった。

また、今回の調査対象者である高校生は、設定された8つの発達課題の項目のうち自律性、自主性、同一性においてその達成度がやや低いという結果であった。

今後の研究においては高校運動部所属者に着目した場合、具体的にどのような要因がこれらの結果に影響を及ぼしているのか等の詳細な分析を行うことにより運動部活動の利点を明確にすると共に、運動部所属者間での達成状況別の比較検討により、今後よりよい運動部活動の在り様について検討を進めていく必要がある。

## 参考引用文献

- 1) 2) 三重県競技力向上対策基本方針<2013.10.25 現在>  
<http://www.pref.mie.jp/KENGIKAI/katsudou/iinkai/siryou/2012/souti/0315/>
- 3) 大隈節子 学校運動部への所属経験が大学生のアイデンティティに及ぼす影響 三重大学教育学部研究紀要 第64巻 2013 pp.125-133.
- 4) 中西信男・佐方哲彦 2002 EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査— 上里一郎監修 心理アセスメントハンドブック第2版 西村書店